



Title	Ayida Kubatova, Kırgızistan'da Ceditçilik Hareketi (1900–1916), Aktaran: Ali Ünal, Ankara: Bengü, 2018, 276 p.
Author(s)	小松, 久男
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 114-114
Issue Date	2019-07-31
DOI	10.14943/jacas.15.114
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88364">http://hdl.handle.net/2115/88364</a>
Type	article
File Information	JB015_018komatsu.pdf



[Instructions for use](#)

**Ayida Kubatova, *Kırgızistan'da Ceditçilik Hareketi (1900–1916)*,  
Aktaran: Ali Ünal, Ankara: Bengü, 2018, 276 p.**

小松 久男

周知のように、19世紀末クリミア半島やヴォルガ・ウラル地方で始まったジャディード運動は、20世紀の初頭、とくに1905年革命以後ロシア領トルキスタンにも広がり、各地に新方式学校が開校されるとともに、それを拠点として近代の諸条件に適合した啓蒙・改革運動が進展していった。この運動は1917年のロシア革命期やソ連時代初期に中央アジアの政治と文化において指導的な役割を果たした現地出身の知識人を育成したことでも大きな意義をもっている。しかし、ソヴィエト政権が確立するにともなって、それは反動的な「汎イスラーム主義」や「汎テュルク主義」あるいは「ブルジョワ民族主義」の烙印をおされ、長く正当な評価を受けることはなかった。ロシア・ムスリム地域におけるジャディード運動の再評価は、ソ連末期のペレストロイカ時代に始まり、ソ連解体後タタルスタンやウズベキスタンの研究者を中心として多数の研究が発表されている。しかし、中央アジアについては、これまでのジャディード運動研究には地理的な偏りが見られた。すなわち、対象はほとんど現在のウズベキスタンに相当する地域に限られており、クルグズ人地域（おもにセミレチエ州とフェルガナ州）における動向については知られるところが少なかった。本書、アイダ・クバトヴァ著『クルグズスタンにおけるジャディード運動（1900～1916）』は、このような研究上の欠落を埋めるものである。

本書はクルグズ語の原書（Аида Эсенкуловна Кубатова, *Кыргызстандагы жадидчилик кыймылы (1900–1916)*, Бишкек, 2012, 203 p.）からのトルコ語訳である。評者はクルグズ語を読むことはできないが、本書の興味深い内容にふれて紹介を思い立ったしだいである。このことをあらかじめお断りしておきたい。著者のクバトヴァ氏は、1989年にクルグズ国立大学を卒業、2013年歴史学博士候補となったのち、現在はクルグズ共和国科学アカデミー・歴史・文化遺産研究所で19～20世紀初頭クルグズスタン史部長を務められている。また、訳者はビシュケクに所在するクルグズ・トルコ・マナス大学に所属するアリ・ウナル氏である。

本書は、訳者のまえがきが続いて以下の構成をとっている。

## 序文

第1部：テュルク諸民族の統合とトルキスタンにおける民族独立運動の先駆としてのジャディード運動

- 1.1 ジャディード運動の出現とタタール人・バシキール人教員のクルグズ人地域における活動
- 1.2 ジャディード運動の中央アジアへの普及、著名な指導者
- 1.3 ジャディード知識人の刊行した新聞・雑誌とその社会・政治的な役割

第2部：クルグズスタンにおけるジャディード知識人の社会・政治的および教育活動

- 2.1 ジャディード知識人の社会・政治的活動：シャブダン・ジャンタエフの請願(1905年6月)、第1回セミレチエ地方ムスリム大会(1906年3月31日～4月1日)、第3回ロシア・ムスリム大会(1906年8月16～21日)、カザフ・クルグズのウズンアガチ大会(1910年10月21日)
- 2.2 ジャディード知識人の教育分野における活動、クルグズスタンにおける新方式学校
- 2.3 クルグズ民族教育システムの先駆者としてのジャディード知識人(教育家)

## 結論

## 参考文献

## 用語解説

まず、本書の内容を簡潔に紹介しておこう。序文では、研究の目的と研究史の整理、主な史料の解説がなされている。20世紀初頭からトルキスタンのクルグズ人地域において教育改革さらには社会・政治変革をめざしたジャディード運動の解明は、独立後のクルグズスタンにおける新しい国民意識の形成に資するというのが、著者の基本的な立場である。研究史では、近年の動向に限ることなく、帝政期に教育行政に携わったS. M. グラメニツキーらの著作やソ連時代の研究にも目を配っていることが注目される。ソ連期の研究はたしかに体制のイデオロギーに制約されていたが、そうした中でも実証的な研究をおこなっていた研究者がいたことは事実であり(彼らも現代の研究者と同一の史料を読んでいたはずである)、著者の姿勢は公正と言えるだろう。史料として第1に挙げられているのは、ウズベキスタン中央国立文書館に所蔵されているトルキスタン地方保安局の文書であり、この中にはセミレチエ州でジャディード知識人の動静を探った秘密諜報員たちの報告が少なからず含まれている。第2は1900～1910年代にロシア・ムスリム地域で刊行された『アイカプ』や『シューラー』などの定期刊行物である。第3はクルグズスタン中央国立文書館など国内の文書館に所蔵される史料であり、これにクルグズスタン科学アカデミー写本フォンドが加わっている。この

フォンドにはジャディード知識人の残した手稿も含まれていて興味深い。

第1部の1.1ではガスプリンスキーらの先達によるロシア・ムスリム地域におけるジャディード運動の展開を概観するとともに、タタール人やバシコルト人がクルグズ人地域に創設した新方式学校について考察を加えている。カラコル(プルジェヴァリスク)市にはイスマイル・ガスプリンスキーの名前を冠した新方式学校が彼の存命中に創設され、それは1920年代初めまで存続したこと、またウファアのガリーイェ・マドラサには少なからぬクルグズ人学生が留学し、そこからイシェナル・アラバエフ(1882-1933)をはじめとする指導的なクルグズ知識人が輩出したことは、ジャディード運動のネットワークがクルグズ人地域にたしかなインパクトを与えたことを例証している。

1.2では、ロシアによる征服以前からトルキスタンではワクフ財に支えられたマドラサとモスクに付属するマクタブによる教育システムが機能していたことを確認したうえで、ジャディード運動の普及とその担い手、これに対する植民地当局の対応について考察している。後半ではタシケントのムナツヴァル・カリやサマルカンドのベフブーディーらトルキスタンの指導的なジャディード知識人に加えて、アフメト・バイトウルスノフらのカザフ知識人、そして彼らの思想や行動に触発されたクルグズ知識人の活動が描かれている。

1.3ではジャディード運動の普及に大きな役割を果たした新聞・雑誌を概観し、そこに掲載されたいくつかのクルグズ関連記事を紹介している。これらの定期刊行物にはロシア・ムスリムの全国紙ともいえるガスプリンスキーの『テルジュマン』やアブデュルレシト・イブラヒムの『ウルフェト』などのほか、トルキスタンやカザフ草原の新聞(著者は『カザク』の編集部にはアラバエフも加わっていたと指摘しているが(112頁)、根拠は示されていない)も含まれている。フェルガナ盆地奥のオシユの郵便局でも1913年には81,795部、79種の新聞を扱っていたという事実は興味深い。

第2部の2.1は、1905年革命以後に活発化したクルグズの社会・政治運動とそれを担ったアフマトバク・コイバガロフらのジャディード知識人に光をあてる。表題にある請願やロシア・ムスリム大会への参加、地方的な大会の開催などからこの時期の社会・政治運動の実像を明らかにしたことは本書の功績と言える(ウズンアガチ大会ではロシア農民の入植を停止させるようドゥーマとツァーリに請願することが決議された)。ここではジャディード知識人の行動を監視していた「カラ」などの暗号名をもつ秘密諜報員の報告が叙述に生彩を与えている。たとえば、「カラ」は1912年4月、コイバガロフらに取り寄せている『アイカプ』などの新聞は「遊牧のムスリム民衆は土地や郷土を奪われている」と記し、政府の事業は敵対的に論じられている」と報じていた。

2.2ではクルグズ人地域に開設された新方式学校を丹念に調べ上げて詳細な考察を加えている。それは1901～1902年にはピシュベクに2校、トクマクに1校を数えるのみだったが、

シャブダン・バートゥル(1839-1912)らのマナプや篤志家、教育家の支援と努力によって増大し、しばしばヴォルガ・ウラル地方のマドラサに学んだクルグズ人が教員を務めた。著者によれば、1917年トルキスタンにはおよそ100校の新方式学校があり、4,000人の生徒が学んでいたが、このうち30校はクルグズ人地域にあった。その上で「新方式学校の3分の1がクルグズ人地域に所在したことはジャディード知識人の活発な活動の証拠である」(197～198頁)と指摘する。

2.3ではクルグズ人地域に教育システムを作り上げるのに貢献したイシェナル・アラバエフ(イスタンブルへの留学経験ももつ)、カイユム・ミフタコフ(バシコルト人の教育家、1892-1949)、オスモナル・スドゥコフ(1875-1940)、詩人のモルド・クルチ(1866-1917)、ウブライ・アブドラフマノフ(1888-1967)、カスム・トゥヌスタノフ(1901-38)、アルダシュ・モルド(1874-1930)らの活動を列伝風に解説している。これまであまり知られることのないジャディード人士について、読者はまとまった情報を得ることができる。高名なモルド・クルチを迎えたドゥンガン人の店主がラグマンをふるまったところ、モルド・クルチが即興で絶賛の詩を読んだという逸話も紹介されている。彼らの多くは1916年反乱の惨劇を経験し(一時新疆に避難した例も多い)、また新生クルグズ共和国の建設に貢献しながらスターリン時代の粛清の犠牲となった場合も少なくない。

結論では本書の要点をまとめた後、ジャディード運動研究の深化のためにいくつかの提言を行っている。たとえば、ジャディード知識人がソヴィエト政権の初期に行った活動に関する資料の収集、クルグズ人地域のジャディード知識人の著作を翻訳し、研究成果を文学や哲学の専門家と共同して刊行すること、トルコ、ウズベキスタン、カザフスタン、タタルスタン、バシコルトスタンなどの研究者との共同研究、アルヒーフ情報の共有、イスラーム文化と歴史の講義に際してジャディード運動史を活用することなどが提案されている。

本書の最大の功績は、先にもふれたように、これまで長く見過ごされてきたクルグズ人地域におけるジャディード運動の展開を解明したことにある。その際、著者はロシア・ムスリム地域という広域に目を配ると同時に、クルグズ人地域というローカルな地域におけるジャディード運動の実情を丹念に掘り起こしている。結論に示された提言も、建設的かつ実践的と言えるだろう。

その上で、いくつか気の付いたことを記しておきたい。まず、著者は1.2に見られるように、トルキスタンのジャディード知識人とカザフ草原の知識人をすべてジャディード知識人と見なしているが、これは両者の背景や戦略の違いを無視することになる。クルグズ知識人はカザフ草原のアラシュ派知識人やヴォルガ・ウラル地方ならびにトルキスタンのジャディード知識人など多様な知的潮流から刺激を受けて成長したと考えるべきだろう。なお、ムスタファ・チョカエフを含むカザフ知識人がトルキスタンの新方式学校を卒業した(91頁)とい

うのは明らかな誤りである。彼らが学んだのはロシア式の学校であった。どのような教育を受けたかは、各人のプロフィールをつかむうえで重要な要素である。

次に著者は1917年初頭のトルキスタンに約100校を数えた新方式学校のうち3分の1はクルグズ人地域に所在したと指摘しているが、この数値は過大に見える。この学校数は、同じくウズベキスタンのアルヒーフ資料に依拠したベンドリコフの先行研究にほぼ対応しており、これによれば、1917年ころ行政当局が算定した新方式学校の数は92校で、その内訳はシルダリヤ州に39校、フェルガナ州に30校、セミレチエ州に18校、サマルカンド州に5校であった〔Бендриков 1960: 261〕。これを見るとセミレチエ州はともかくとして、稠密な定住民人口をもつフェルガナ州にも相当数のクルグズ人学校があったことになる。仮にそうだとすれば「ジャディード知識人の活発な活動」以外にもその要因を検討する必要があるだろう。たとえば、新方式学校の普及を阻害したのはムスリム社会内部の保守派の反対と行政当局の介入であった。クルグズ人地域の場合、はたしてこのような阻害要因は働かなかったのだろうか。また、新方式学校には時期によって消長があり、とりわけ、1910年ころからトルキスタン総督府は新方式学校の教師は「生徒と同族の現地民」でなければならないと定めた結果、多くの新方式学校からタタール人教師が追放され、学校数は一時的に減少したことが確認されている。著者の列挙する学校はこうした政策の影響を受けなかったのだろうか。一方、行政当局が把握していなかった学校も相当数あったことも考慮すると、学校数については慎重に扱う必要がある。上記のような検討をふまえなければ、著者の指摘は誇張と受け取られることだろう。

関連して、著者は多くのクルグズ知識人が輩出したガリーイエ・マドラサに注目しているが、最近のハプトディノフの研究によれば、1910年以降カザフ草原やトルキスタンからタタール人教師が大量に追放されると、この先進的なマドラサはカザフ人やトルクメン人など非タタール人学生の受け入れを急速に増やしたという。これはロシア・ムスリム地域における教育システムの動態を示す一例として興味深い。なお、著者がソ連期の研究に依拠して掲げているウファの新方式学校における週ごとの科目時間数（たとえば理科・社会 35.6%、ロシア語 14.1%、宗教 28.8% など）は、まさに1914年のガリーイエ・マドラサのものと思われる〔Хабутдинов 2013: 122〕。ここは初等学校レヴェルの新方式学校とは区別して、「新方式のマドラサ」とすべきではないだろうか（56頁）。

著者が利用した史料の一つにロシア・ムスリム地域に流通していた定期刊行物があり、これはいくつか興味深い事実を伝えている。その実例を著者が引用している『シューラー』誌上の二つの記事から見てみよう。最初の記事は、1915年にアンディジャンの著名な詩人チョルパンがオシュについて書いた記事であり、該当部分を訳出すると次のとおりである。



オシユはトルキスタンの他の都市と比べるとあらゆる面で後れをとっている。ここには二つの新方式学校があり、両校では60名の生徒が学んでいる。またロシア語・現地語学校が一つあり、ここでは昼間は40名、夜間は30名ほどのムスリム生徒が学んでいる。個人的に学ぶ者も5～6名いる。[新聞などの] 読書室はなく、ロシア人もいないというか、少ない。図書館もなかったが、最近オシユの青年からカドルジャン・カブルジャンとユスフジャン・ユヌソフ両氏が図書館開館の請願をしたとのことである。成功を祈りたい [Cholpan 1915: 288]。

チョルパンは立ち後れたオシユの町にも近代の変容の兆しが表れていることを指摘している。もう一つの記事は、1913年にコーカンド在住のアハル・アッラーなる人物がオシユとその聖地タフティ・スレイマンについて寄稿した記事である。該当部分にはこう書かれている。

オシユ市にはいくつかのマドラサと多数のマクタブがある。学生たちは学問を学ぶためにアンディジャンやコーカンド、ブハラに行く(そこには新方式学校があったが、タター人教師が追われてから新方式が存続できたかについては知らない) [下線は引用者]。オシユでは老若のウラマーやムフティー、ムダッリスにこと欠かず、庶民の中にも開明的な人はいるが、その数は太陽の一閃、海の一滴ほどにすぎない [Ahal Allāh Khayrallāh oghli 1913: 456]。

この筆者はロシア当局によるタター人教師追放という措置によって新方式学校の存続が危うくなったことを示唆している。なお、本書では下線部分を「これを継続させる教師はいなくなった *muallimler kalmadı*」と訳しているが、原文は *ma'lūmātīm yoq* であり、上記のように訳すべきだろう (71頁)<sup>(1)</sup>。

著者はこの二つの記事に着目しながら、別々に紹介しているために両者のつながりが見えなくなっている。後者の後にチョルパンの記事を並べてみれば、オシユにおける変化のありようを明示することができたはずである。この例に限らず、ムスリムの定期刊行物を精査すれば、ロシア行政当局が残したアルヒーフ資料に優るとも劣らぬ情報をえることができるだろう。

最後に、著者はセミレチエ州のムスリム知識人が、1906年8月にニージニー・ノヴゴロドで開催された第3回ロシア・ムスリム大会に積極的に関与していたことを指摘し、アフマトベク・コイバガロフとI. アブドゥルダエフ(結論ではダブルダエフ)の二人が出席 (135頁)

(1) この誤りはクルグズ語の原書(51頁)でも同様であり、トルコ語への翻訳時に起こったものではない。なお、著者はこの引用については別の文献に依拠しており、そこでの誤りを受け継いでしまったと考えられる。

したほか、セミレチエ州のカザフ・クルグズ名で、大会宛に民衆教育の重要性を訴える書簡を急送した(146頁)と述べている。しかし、注に示された大会議事録の該当頁にこれらを明示する記述は見当たらず、典拠としては正確さを欠いている。さらに言えば、管見の限り議事録にこうした記述を見出すことはできなかった。ただし、大会中の8月18日のマクタブ・マドラサ検討委員会で、「トクマクから、セミレチエ州のムスリムから」大会の成功を祈る電報が寄せられていると報告されたことは議事録に明記されており[*Rusya Müslümanlarının 3. Nedvesi* 1906: 81]、セミレチエ州の知識人が学校改革に関する審議を注視していたことは明らかである。なお、この電報の送信者たちが、これはロシア化政策ではないかとして抗議の意思を示したロシア国民教育省の通達は、1870年ではなく1906年3月31日に出されたものである。

以上いくつか問題点を指摘したが、ジャディード運動の総合的な研究のためには、著者のあげる国々のほか、欧米や日本の研究者との情報の共有および共同研究が不可欠である。その意味でも、本書をクルグズ語からトルコ語に翻訳して幅広い研究者に提供した訳者の労を多としたい。ただし、もう一度丁寧な校正をしておけば、散見する誤植は避けられたことだろう。

## 参考文献

- Ahal Allāh Khayrallāh oghli 1913. “‘Osh’ shahri ham ‘Takht-i Sulaymān’,” *Shūrā*, 1913, No. 15.
- Cholpan 1915. “Osh,” *Shūrā*, 1915, No. 9.
- Rusya Müslümanlarının 3. Nedvesi* 1906. *Rusya Müslümanlarının 3. Nedvesi*, Kazan.
- Бендриков, К.Е. 1960. *Очерки по истории народного образования в Туркестане (1865-1924 годы)*, Москва.
- Хабутдинов, А.Ю. 2013. *Институты российского мусульманского сообщества в Волго-Уральском регионе*, Москва.

(東京外国語大学)